

幼児期・児童期の情動表出の発達に関する研究動向

平川 久美子*

A Review of Research on the Development of Emotional Expression in Childhood

Kumiko HIRAKAWA*

**Department of Human Education, Faculty of Human Studies, Ishinomaki Senshu University, Miyagi 986-8580, Japan*

1. 幼児期・児童期における情動表出の発達

私たちが日々経験する情動には、個体の生き残りや繁殖を高度に保障するという生物学的機能と、個体間でのコミュニケーションを進行させるという社会的機能という大きく2つの機能があると言われている。つまり情動は、私たちが他者と良好な関係を構築し、適応して生活していく上で、非常に重要な役割を果たしている。情動の中でもとりわけ情動表出は社会的機能と関連するものであり、適切な情動表出は社会的な相互作用をうまく行うために、そして自分のウェルビーイングのために重要な必要条件である (Josephs, 1994)。これは、自分の情動を適切に表出しないと他者との関係の確立や維持にマイナスに作用する可能性があるということでもある (Mesquita & Frijda, 1992)。

子どもは、自分の情動状態や状況的な要求に応じて、いつ、どのように情動表出を行うかということを経験とともに学び、情動表出を適切な質や量へと調整するようになっていく。それでは、情動表出はどのように発達していくのだろうか。平川 (2013a) は、幼児期から児童期にかけての情動表出の発達について検討するにあたり、「自分の情動そのままの表出や自分の情動を実際よりも強めた表出」を情動の主張的表出、「自分の情動を実際よりも弱めた表出やニュートラルな表出」を情動の抑制的表出と定義し、情動表出を主張と抑制という2つの方向性をもつものとして捉えている。本研究においても、幼児期・児童期における情動表出の発達を情動の抑制的表出と主張的表出に分けて整理していく。

これまでの幼児期・児童期における情動表出に

関する研究では、情動の抑制的表出に関して多くの研究がなされてきた。実験的観察を用いた研究では、期待外れのプレゼントをもらう場面において3、4歳児でもプレゼントの送り主の前でネガティブな情動表出を抑制することが示されている (Cole, 1986; Josephs, 1994)。一方、仮想場面を用いた研究によって、6歳頃になると、情動表出を抑制することが求められるような場面において実際の情動とは異なる表情をすることが明らかになっている (e.g. Gross & Harris, 1988; Harris, Donnelly, Guz, & Pitt-Watson, 1986; Jones, Abbey, & Cumberland, 1998; 溝川, 2007; 塚本, 1997)。また、児童期においても年齢ともに実際の情動表出をより抑制するようになることが多くの研究によって示されている (e.g. Gnepp & Hess, 1986; Shipman, Zeman, Nesin, & Fitzgerald, 2003; Zeman & Shipman, 1998)。さらに、幼児や児童は情動表出を制御する動機の種類 (e.g. 向社会的動機、自己防衛的動機) によって異なる情動表出をすること (e.g. Gnepp & Hess, 1986; 平川, 2008; 溝川, 2007; Saarni, 1979) なども明らかにされている。

一方、情動の主張的表出に関しては、自分の情動や意図を相手に明確に伝えることで他者との関係を形成・維持するという点で、対人関係において非常に重要であると考えられるにもかかわらず、これまでほとんど検討されてこなかった。しかしながら、怒りの主張的表出の発達について仮想場面を用いて検討した平川 (2014) では、言語的主張をしない場面では年中児よりも年長児および小学1年生のほうが表情で怒りをより強く表出すること、小学1年生では言語的主張をする場面

*1石巻専修大学人間学部人間教育学科

よりもしない場面のほうが表情で怒りをより強く表出することが明らかにされ、情動の抑制的表出だけでなく主張的表出もまた幼児期から児童期にかけて顕著に発達することが明らかになりつつある。

2. 幼児期・児童期における情動表出の発達に影響を及ぼす要因

これまで、幼児期・児童期における情動表出の発達について概観してきたが、情動表出の発達にはどのような要因が影響を及ぼしているのだろうか。Gnepp & Hess (1986) は情動表出をいつ、どのように制御するかということの発達は、自分が他者からどのように認知されるかを予想するのに必要とされる認知的能力や社会的経験に依存すると指摘している。遠藤 (2002) も、情動発達の背景を考える場合には子どもの事象に対する評価の仕方の多様性と、子どもが出会うであろう事象そのものの多様性の両方を考慮する必要があると指摘している。前者は個人の認知的要因、後者は環境要因であると考えられる。したがって、ここでは認知的要因と環境要因の大きく2つに分けて、情動表出の発達との関連をみていくこととする。

(1) 認知的要因

まず、情動表出の発達に影響を及ぼす認知的要因の中でも、特に関連が指摘されてきたのは他者信念の理解である。これまで、誤信念課題を用いて幼児における他者の認識内容の理解を調べた多くの研究によって、他者の誤った信念は4歳半頃から理解できるようになり、5歳半頃になると他者の知覚経験や行為との因果関係の中で他者の行動の理由まで適切に説明できるようになることが明らかにされてきた (e.g. 木下, 1991; Nadel & Melot, 2001; 小川・子安, 2008; 2010)。このような他者信念の理解が情動表出の発達に影響を及ぼすことは、多くの研究で指摘されている。例えば、宮本 (1998) では、誤信念課題の誤答群よりも正答群のほうが、実際の情動とは異なる情動表出をすること、そのような表出を行う意図、そのような表出によって作られる他者の誤信念などについてより適切に理解していることが示された。他者信念の理解と怒りの主張的表出との関連について

検討した平川 (2013b) では、主張的動機に基づいて表情のみで怒りを表出する場面では、他者信念を理解している者は理解していない者よりも怒りを強く表出することが明らかにされている。

他者信念の理解については、宮本 (1998) や平川 (2013b) のような一次的信念の理解だけでなく、二次的信念の理解と情動表出との関連についても検討されている。二次的信念とは、『「他者が〇〇と考えている」と第三者が考えている』というような入れ子構造をもつもので、小学1年生 (6~7歳) で多くの者が理解できるようになる (林, 2002)。例えば、溝川・子安 (2008) では、二次的誤信念課題の誤答群よりも正答群のほうが、偽りの悲しみ表出が生む他者の誤信念についてより理解していた。また、Banerjee & Yuill (1999) では、二次的誤信念課題の誤答群よりも正答群のほうが、自己呈示的動機 (自己についての他者の評価をコントロールするために表情を偽る) に基づいた情動表出の制御をより理解していることが示された。さらに、小学1・3・5年生を対象とした Hayashi & Shiomi (2015) でも、表示規則の理解は二次的信念の理解と関連していることが示されている。

これらの研究では、他者信念の理解を調べるための課題として様々な誤信念課題が用いられているが、いずれも他者のもつ信念についてより理解している者のほうが、実際の情動とは異なる情動表出を行い、それによって他者にどのような影響を及ぼすかを理解していることを示す結果であると言える。情動表出を制御する場合、実際の情動と情動表出とは必ずしも一致しないことや、実際の情動とは異なる情動表出によって他者に誤った信念を生み出すことなどを理解することが必要とされるため、他者信念の理解との関連が見られると考えられる。

一方、情動表出の発達に影響を及ぼす要因として、他の認知的要因に焦点をあてた研究はほとんどなされていない。内田 (1991) は、情動表出の制御には自分の感情表出が社会的にどう解釈されるかを予測したり、相手が何を意図しているかをモニターしたりするといった認知能力の要因が関連しており、プランニング能力やモニタリング能力の発達が情動表出の制御の発達に影響している

可能性を指摘した。また、平川（2015）は、小学1年生頃になると、表情と言語という情動表出の2つのモダリティの間でバランスを調整しながら情動表出を行うようになることから、このような情動表出の背景には、情動表出において表情表出と言語表出は相補的に機能するという認識があるとした。そこで、相補性の理解（ある事柄についてAが増えるとBが減るというようにAとBの両方を考慮すると補い合って結局は同じであるということの理解）と仮想場面における怒りの主張的表出との関連を検討したものの、両者の間に関連はみられなかった（平川、2015）。

（2）環境要因

子どもは家庭や保育所、幼稚園、小学校などでの様々な人との関わりの中で情動表出を発達させていく。情動の社会化は、家庭の中で始まり、子どもが保育所や幼稚園などより広い社会へと移行していくのに伴って、外の世界へと広がっていくとされている（Zahn-Waxler, 2010）ことから、環境要因として、まずは家庭での親との関わりが挙げられる・子どもは自分の情動が家族によって様々に扱われる経験や、ある家族の情動が他の家族からどのように扱われるのかを見聞きする経験を家庭の中で積み重ねることを通して、人がある情動を経験しているときにはどのように振る舞い、どのように対処するのかを学ぶ（Thompson & Meyer, 2007）。Eisenberg, Cumberland, & Spinard (1998) は、親が子どもの情動を社会化する直接的な方法として、親の情動表出、子どもの情動に対する親の反応、情動に関する親子の会話を挙げている。

第一に、親の情動表出については、ネガティブ優勢の情動表出性をもった家庭環境が自己防衛的な表示規則に関する知識を予測することが明らかにされている（Jones, Abbey, & Cumberland, 1998）。しかしながら、ネガティブな情動表出性が高いほうが、常に情動表出の発達に肯定的な影響を及ぼすわけではない。Wong, McElwain, & Halberstadt (2009) は、親のネガティブな情動表出性と子どもの情動の社会化との関連は曲線的那样であり、極端に表出性が低い場合は子どもが情動について学び、情動を制御する機会が限られて

しまい、逆に極端に表出性が高い場合は子どもが情動調整不全になる可能性を指摘している。したがって、親がネガティブな情動を適度に表出することが、子どもの情動表出の発達を促すと考えられる。

第二に、子どもの情動に関する親の対応については、親が子どものネガティブな情動表出に対してネガティブに反応することが、子どもの情動制御の発達に否定的な影響を及ぼすことが指摘されている（e.g., Eisenberg, Fabes, Carlo, Troyer, Speer, Karbon, & Switzer, 1992; Eisenberg, Fabes, & Murphy, 1996）。一方、幼児を対象とした縦断研究においては、母親が子どもの情動にポジティブに反応することとネガティブに反応しないことの両方が、子どもの情動理解を予測することが示されている（Denham, Zoller, & Couchoud, 1994）ことから、親が子どもの情動にポジティブに反応することが、子どもの情動表出の発達を促すと考えられる。

第三に、情動に関する親子の会話については、就学前の時期において母親が情動について説明することが、4年後の子どもの表示規則の理解と関連することが示されている（Garner, 1999）。また、田中・岩立（2006）は、年少児・年長児とその母親を対象に、子どもに対する母親の言葉かけと子どもの情動理解との関連を検討し、母親の情動についての言及が少ない群よりも多い群のほうが、子どもはネガティブな情動についてより理解していることを明らかにした。そして、親子の会話の中でも、とりわけネガティブな情動に関する会話の重要性が指摘されている。例えば、坂上（2010）は、他者との関わりの中で比較的強い怒りの情動が生じる歩行開始期の子どもは、葛藤的なやりとりに参加したり、過去に自分が経験した葛藤について養育者と会話したりする中で、養育者に支えられながら洗練された自己主張や交渉の仕方、葛藤の解決方法、怒りの表出や調整の仕方を学び、怒りそのものの性質に関する理解を深めていくと指摘している。子どもが2～5歳のときの親子の会話の分析を行った Lagattuta & Wellman (2002) では、親子はポジティブな情動についての会話よりもネガティブな情動についての会話において、過去の情動や情動の原因、情動と他の心的

状態との関連についてより多く会話をする事、このような違いは3歳前から就学前の時期を通じてみられることが示された。このことから、情動に関する親子の会話の中でもとりわけネガティブな情動について会話をする事が、子どもの情動表出の発達を促すと考えられる。

一方、幼児期・児童期は家庭以外での人との関わりが顕著に増加する時期であり、保育者や教師、仲間との関わりの中で、どのような状況において、どのような情動表出をするべきかを学んでいくと考えられる。とりわけ互いの要求の調整が必要となる仲間との葛藤場面は、どのような情動表出をすることがお互いの欲求を満たすことにつながるかなど、情動表出について学習し、実際に練習する場として非常に重要な役割を果たしていると考えられる。久保（2008）は、子ども自身が園生活で怒りを表出する経験やいざこざの当事者となる経験、調停や仲裁をする経験が怒り表出の機能の認識の発達に何らかの役割を果たしていると指摘している。このように、情動を当事者として経験したり身近に見聞きしたりする経験が、適切な情動表出の方法について学ぶ機会となり、情動表出の発達を促すと考えられる。しかしながら、仲間とのどのような関わりが情動表出の発達に影響を及ぼすかを明らかにするような実証的な研究はほとんどなされていない。

3. 今後の課題

本研究では、幼児期・児童期における情動表出の発達とその発達に影響を及ぼす要因について、先行研究から得られた知見を整理してきた。しかしながら、まだ十分に検討されていない部分も残されていることから、ここでは今後の課題について述べる。

第一に、他者との相互作用場面における情動表出の検討である。幼児期・児童期における情動表出の発達は、情動表出のレパートリーの増加として捉えることができる。就学前の子どもは仮想の対人葛藤場面において葛藤の相手がどのような方略を用いるかによって異なる対処方略を用いることが示されている（Eisenbeg & Garvey, 1981; Thornberg, 2006）ことから、子どもたちは他者との関係の中で様々な情動表出をランダムに使用

しているのではなく、その時の状況に応じて情動表出を使い分けしていると考えられる。また、自己主張タイプ児（5歳児）の遊びをめぐる交渉方略に関する縦断的な行動観察の結果、時期を追うにつれて様々なスキルを用いて状態の改善を図るようになること、ある方略が効果をもたないときには即座に他の方略に切り換えるようになることが明らかにされている（高濱, 1995）。このように、日常場面では場面や相手の反応など状況に応じた柔軟な情動表出を行うようになることから、今後は、他者との相互作用場面において他者の反応に応じてどのような情動表出がなされるのかを明らかにすることが必要であると考えられる。

第二に、情動表出の発達に影響を及ぼす要因の検討である。認知的要因については、他者信念の理解については多くの研究がなされているのに対して、モニタリング能力やプランニング能力、相補性の理解などの他の要因についてはほとんど検討されていない。平川（2015）では、情動表出と相補性の理解との関連がみられなかった理由として、相補性の理解を調べる課題が不適切であった可能性が指摘されている。よって、相補性の理解を調べる課題を精査した上で、情動表出との関連を検討することが必要であると考えられる。今後は他者信念の理解以外の認知的要因について検討を行い、情動表出の発達のメカニズムを明らかにするような研究が求められている。一方、環境要因については、家庭での親との関わりについては検討されているが、保育所、幼稚園、小学校における保育者や教師、仲間との関わりについては十分に検討されていない。しかしながら、家庭以外の場所で過ごす時間が増加する幼児期・児童期においては、保育者や教師、仲間との関わりの中で様々な経験を積み重ね、自らの経験を通して、また他者の経験を観察することを通してどのような状況においてどのような情動表出が適切かを学んでいく。したがって、今後は家庭以外での人との関わりが情動表出の発達にどのような影響を及ぼすかということも検討する必要があると考えられる。

引用文献

Banerjee, R., & Yuill, N. (1999). Children's understand-

- ing of self-presentational display rules: Associations with mental-state understanding. *British Journal of Developmental Psychology*, 17, 111-124.
- Cole, P. M. (1986). Children's spontaneous control of facial expression. *Child Development*, 57, 1309-1321.
- Denham, S. A., Zoller, D., & Couchoud, E. A. (1994). Socialization of preschoolers' emotion understanding. *Developmental psychology*, 30, 928-936.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Carlo, G., Troyer, D., Speer, A. L., Karbon, M., & Switzer, G. (1992). The relations of maternal practices and characteristics to children's vicarious emotional responsiveness. *Child Development*, 63, 583-602.
- Eisenberg, N., Fabes, R., & Murphy, B. (1996). Parents' reactions to children's negative emotions: Relations to children's social competence and comforting behavior. *Child Development*, 37, 2227-2247.
- Eisenberg, A. R., & Garvey, C. (1981). Children's use of verbal strategies in resolving conflicts. *Discourse Processes*, 4, 149-170.
- 遠藤利彦. (2002). 発達における情動と認知の絡み. 高橋雅延・谷口高士編 *感情と心理学*. pp.2-40. 京都: 北大路書房.
- Garner, P. W. (1999). Continuity in Emotion Knowledge from Preschool to Middle-Childhood and Relation to Emotion Socialization. *Motivation and Emotion*, 23(4), 247-266.
- Gnepp, J., & Hess, D. L. (1986). Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental Psychology*, 22, 103-108.
- Gross, D., & Harris, P. L. (1988). False beliefs about emotion: children's understanding of misleading emotional display. *International Journal of Behavioral Development*, 11, 475-488.
- Harris, P. L., Donnelly, K., Guz, G. R., & Pitt-Watson, R. (1986). Children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. *Child Development*, 57, 895-909.
- 林 創. (2002). 児童期における再起的な心的状態の理解. *教育心理学研究*, 50, 43-53.
- 林 創. (2015). 児童期の「心の理論」—大人へとつながる時期の教育的視点を踏まえて. 子安増生(編著). 「心の理論」から学ぶ発達の基礎—教育・保育・自閉症理解への道—. 95-106. 京都: ミネルヴァ書房.
- Hayashi, H., & Shiomi, Y. (2015). Do children understand that people selectively conceal or express emotion? *International Journal of Behavioral Development*, 39, 1-8.
- 平川久美子. (2008). 幼児における情動表出の制御の理解に関する研究: 制御の動機に着目して. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 57(1), 311-326.
- 平川久美子. (2013a). 幼児期から児童期にかけての怒りの主張的表出の発達. *東北教育心理学研究*, 13, 11-20.
- 平川久美子. (2013b). 幼児・児童における表情による怒りの主張的表出の発達—他者信念の理解との関連の検討—. *乳幼児教育学研究*, 22, 101-110.
- 平川久美子. (2014). 幼児期から児童期にかけての情動の主張的表出の発達: 怒りの表情表出の検討. *発達心理学研究*, 25, 12-22.
- 平川久美子. (2015). 幼児・児童における情動表出の発達: 怒りの主張的表出と相補性の理解との関連. *家庭教育研究所紀要*, 36, 43-49.
- Jones, D. C., Abbey, B. B., & Cumberland, A. (1998). The development of display rule knowledge: Linkages with family expressiveness and social competence. *Child Development*, 69, 1209-1222.
- Josephs, I. E. (1994). Display rule behavior and Understanding in preschool children. *Journal of Nonverbal Behavior*, 18, 301-326.
- 木下孝司. (1991). 幼児における他者の認識内容の理解: 他者の「誤った信念」と「認識内容の変化」の理解を中心に. *教育心理学研究*, 39, 47-56.
- 久保ゆかり. (2008). 怒りの表出機能についての認識の発達—インタビューと参与観察による5歳から6歳にかけての縦断的研究—. *東洋大学社会学部紀要*, 45(2), 99-112.
- Lagattuta, K. H., & Wellman, H. M. (2002). Differences in Early Parent-Child Conversations About Negative Versus Positive Emotions: Implications for the Development of Psychological Understanding. *Developmental Psychology*, 38, 564-580.
- Mesquita, B., & Frijda, N. H. (1992). Cultural variations in emotions: A review. *Psychological Bulletin*, 112, 179-204.
- 宮本祐子. (1998). 表情偽装状況の理解における幼児の「心の表象理論」の利用. *心理学研究*, 69, 271-278.
- 溝川藍. (2007). 幼児期における偽りの悲しみ表出の

幼児期・児童期の情動表出の発達に関する研究動向

- 理解. *発達心理学研究*, 18, 174-184.
- 溝川藍・子安増生. (2008). 児童期における見かけの泣きの理解の発達: 二次的誤信念の理解との関連の検討. *発達心理学研究*, 19, 209-220.
- Morris, A. S., Silk, J. S., Morris, M. D., Steinberg, L., Aucoin, K. J., & Keyes, A. W. (2011). The Influence of Mother-Child Emotion Regulation Strategies on Children's Expression of Anger and Sadness. *Developmental Psychology*, 47, 213-225.
- Nadel, J., & Melot, A.-M. (2001). How clear is the 4-year-olds' "clear-cut change" in understanding mind? *Cognitive Development*, 15, 153-168.
- 小川絢子・子安増生. (2008). 幼児における「心の理論」と実行機能の関連性: ワーキングメモリと葛藤抑制を中心に. *発達心理学研究*, 19, 171-182.
- 小川絢子・子安増生. (2010). 幼児期における他者の誤信念に基づく行動への理由づけと実行機能の関連性. *発達心理学研究*, 21, 232-243.
- Saarni, C. (1979). Children's understanding of display rules for expressive behavior. *Developmental Psychology*, 15, 424-429.
- 坂上裕子. (2010). 歩行開始期における自律性と情動の発達: 怒りならびに罪悪感, 恥を中心に. *心理学評論*, 53, 38-55.
- Shipman, K. L., Zeman, J., Nesin, A. E., & Fitzgerald, M. (2003). Children's strategies for display anger and sadness: What works with whom? *Merrill-Palmer Quarterly*, 49, 100-122.
- 高濱裕子. (1995). 自己主張タイプ児の遊びをめぐる交渉の発達. *発達心理学研究*, 6, 155-163.
- 田中あかり・岩立京子. (2006). 母親の幼児に対する「言葉かけ」が幼児の共感性に及ぼす影響—ポジティブ感情の共感に着目して—. *東京学芸大学紀要総合教育科学系*, 55, 63-70.
- Thompson R. A., & Meyer, S. (2007). Socialization of emotion regulation in the family. In J. J. Gross (Ed.), *Handbook of emotion regulation* (pp.249-268). New York: Guilford Press.
- Thornberg, R. (2006). The situated nature of preschool children's conflict strategies. *Educational Psychology*, 26, 109-126.
- 塚本伸一. (1997). 子どもの自己感情とその自己統制の認知に関する発達の研究. *心理学研究*, 68, 111-119.
- 内田伸子. (1991). 子どもは感情表出を制御できるか—幼児期における展示ルール (display rule) の発達—. *日本教育心理学会第33回総会発表論文集*, 109-110.
- Wong, M. S., McElwain, N. L., & Halberstadt, A. G. (2009). Parent, Family, and Child Characteristics: Associations With Mother- and Father-Reported Emotion Socialization Practices. *Journal of Family Psychology*, 23, 452-463.
- Zahn-Waxler, C. (2010). Socialization of Emotion: Who Influences Whom and How? *New Directions for Child and Adolescent Development*, 128, 101-109.
- Zeman, J., & Shipman, K. (1998). Influence of social context on children's affect regulation: A functionalist perspectives. *Journal of Nonverbal Behavior*, 22 (3), 141-165.

付記

本研究は JSPS 科研費 JP15K17279 の助成を受けた。